# 自然体験プログラムで「つながり」づくり 自主自立を尊重し、進化続ける組織運営

## 北海道の元気！NPO訪問 8 NPO法人 ねおす

文・加藤知美

### ◇ 活況を呈す黒松内ぶなの森自然学校

夏休みには三〇人をこえる小中学生が三週間をスタッフとともに過ごす「黒松内ぶなの森自然学校」―。しばし親元を離れ黒松内での夏休みを過ごす子どもたちはリピーターも多い。全国各地から集まり、野外活動や共同生活の中で人間関係を構築していく。慣れてきた頃に、少人数のグループでカヌーや川くだり、自転車などで活動レベルを高めるプログラムへと進み、太平洋から日本海まで約四〇キロを踏破したり、野外道具の使い方を覚えたりして、たくましさが増す。そして最後には、子どもたちが主体となって活動プログラムを企画しチャレンジする。自然と人、人と人とのたくさんの「関わり」を経験してひとまわり大きくなって帰っていく。野外活動の専門家であるスタッフは子どもたちから教わることも多いという。さらに、ボランティアや実習生として、学生や外国人、かつて参加者だった子どもたちなどが加わり、一緒に黒松内とその周辺の豊かな自然の中で本気で遊び、さまざまな体験を重ね、まるで大家族のようになる。

黒松内は、ブナの深い森や海、山、川など多様な自然に支えられ、酪農、漁業、農業がさかんな人口約三二〇〇人の町である。黒松内ぶなの森自然学校は、廃校になった酪農地帯の小学校跡を利用して一九九九年に開校した。「NPO法人ねおす」が、北限のブナの里としてまちづくりがすすんでいた黒松内町に、当時の環境庁による「ふるさと自然塾構想」のモデル地域になるよう協働をもちかけて実現した。自然体験活動や学校団体受入、人材育成などの事業をおこなっているが、山村留学受入の事務局やさまざまな地域活動もおこなっている。当初、自然ガイド養成を目的としてスタートしたが、夏休み長期自然体験活動など、子ども対象の事業に力を入れ、二〇〇三年には、「地域と共に」というキーワードを運営コンセプトに加え、近隣の地域資源の発掘や情報発信などの活動にシフトしてきた。

地域の有識者や環境教育実践者からなる運営協議会が町から運営を委託されており、ねおす理事長の高木晴光さんが運営委員長となっている。運営協議会事務局にはねおすから人材が派遣されている。

黒松内の地域のお年寄りと都会からの子どもたちとの交流
（写真提供：ＮＰＯ法人ねおす）

### ◇ 道内各地に活動拠点、自立した人材の育成

「ＮＰＯ法人ねおす」は、一貫した基本理念をもちつつも、たえず組織を進化させてきた。子どもから大人までを対象に自然体験型環境プログラムを提供する自然学校やネイチャーセンターを道内各地で運営し、北海道らしい持続可能な地域づくりをしている。ネットワーク・協働型の特色ある運営で、地域にねざした活動を展開し、黒松内

ぶなの森自然学校（黒松内町）、川湯エコミュージアムセンター（弟子屈町）、大雪山自然学校（東川町）、登別市ネイチャーセンターふぉれすと鉱山（登別市）などの拠点運営やスタッフ派遣に関わるほか、札幌、苫小牧、中頓別などでもプログラムを展開している。地域の実情にあわせてしくみを考え、エコツアーの企画実施や環境保全をすすめている。

自然体験プログラムの展開により交流を促進し、自然と人、人と人、社会と自然のつながりづくりをするのがＮＰＯ法人ねおすのミッションだが、人材育成に大きな特色がある。他のＮＰＯ・ＮＧＯや大学など国内外からの若い人材が、地域に中長期にわたり滞在し、自然体験プログラムの実施のみならず、地域活動に参加したり、役場や地域団体にかけあう過程を体験的に学び取っていく。未来を担う自主自立した人づくりをめざしている。高木さんは、「個人のミッションと組織のミッションのバランスをいつも考えている」と言う。組織の歯車として動くのではなく、自らが考えて実現させることが求められている。

エコツーリズムの担い手として
札幌藻岩山でのガイドの様子
（写真提供：ＮＰＯ法人ねおす）

ねおすが運営に携わる道内の各拠点が、「ねおす」の名前を前面に出していないのも、事業責任者の役割を明確にするためだ。「ねおす」の看板は実績を示す必要があるときなどに道具として使われればよいとの考えだ。

## ◇「田舎」の価値を発信する

活動の前身は、一九九二年に専門学校の付帯事業として始まった「北海道自然体験学校ＮＥＯＳ」である。当時は、ネイチャーガイドという仕事への理解も少なく、お金をとって自然破壊をしていると批判する新聞投書があったほどだ。一九九七年に独立し、翌年のＮＰＯ法施行と同時にＮＰＯ法人として再出発した。

二〇〇一年のスタッフ研修会では、「ねおすツーリズム憲章」を策定し、学びの場づくりや自然環境の持続可能な利用、北海道らしさの発信をしていくことを確認し、ねおすの考えるエコツーリズムは、環境保全だけでなく地域振興も含む概念であることを明確にした。さらに、二〇〇三年には、独立可能な事業を分離させ、山岳活動のＮＰＯとエコツアーの専門会社をつくり、ねおすグループとしてそれぞれが自立的に運営されている。

高木さん自身も二〇〇一年に黒松内町に住民票を移した。「移り住んで、一次産業、福祉医療などの切実な課題を目の当たりにして、ものすごく見方が変わりました。一次産業地域が国家を支えているはずなのに、グローバル化の影響で、社会の矛盾のしわ寄せが田舎にきています」と語る。しかし、田舎にある、食の生産、農村風景、ゆっくりした時間の流れなどは、ものの豊かさやお金を絶対的価値としてきた現代社会に新しい社会的価値を提示していると考え、近年は地域に立脚したツーリズムによる持続可能な地域づくりへの取組をすすめている。特に二〇〇八年度から始まった農水省の「田舎で働き隊」（農村活性化人材育成派遣支援モデル事業）は、短期間で成果を挙げたとの評価もあり、行政刷新会議による事業仕分けでは要求どおりの判定となった。

ねおすでは、「北海道ふるさとづくりセンター」を設立し、農山漁村で交流を生む人材を育て、地域内外の産・学・官が一緒に活動できるよう地域側の視点からコーディネートするプロジェクトに着手している。

道内各地で活動するＮＰＯ法人ねおすの本部事務所

◆ ＮＰＯ法人 ねおす
所在地 札幌市中央区宮の森２条14丁目１－14
ＴＥＬ ０１１－６１５－３９２３
ＷＥＢ http://www.neos.gr.jp/